

暁子 令和6年12月度特別作品

近江 暁子

十月中旬、広島俳句倶楽部の吟行旅行で、近江の湖北を巡ってきました。古来、この地方は、奈良・京都の都と越を結ぶ文化の道であり、戦国時代には、一大合戦の地になった所で、一度は訪れたいと思っていました。佐保先生、高尾さんの行き届いたご配慮のおかげで、この上もなく楽しい旅になりました。肝心の俳句はありますが、その時感じたままを詠んでみました。

ひととときの秋雨が過ぎ中山道

澄む秋の水豊かなる橋に来る

渡岸寺桜もみちを踏んでゆく

鶉のよく鳴いて近江の朝かな

秋草を分けて琵琶湖の岸に立つ

行く秋の琵琶湖の水を掬ひけり

色草の上のリフトに揺られをり

名の知らぬ色鳥渡り賤ヶ岳

佃煮屋出れば俄かに秋しぐれ

山並みの一つに比叡秋澄めり

《作品鑑賞》

知佳子

学びを重ねた作句の基礎に裏打ちされた、しなやかで新鮮な俳句を作る暁子さんの吟行句を、楽しみ、学ばせていただきました。

澄む秋の水豊かなる橋に来る

澄んだ水の流れの速さ、絶え間ない水音、水に乗り流れる花や葉、浮き沈みする水草、傍流が加わり向きを変える流れ、いくから見ても飽きない水の豊かさです。

秋草を分けて琵琶湖の岸に立つ

行く秋の琵琶湖の水を掬ひけり

行く秋を惜しみながらも、湖に近寄り、手に触れる水を慈しみ、琵琶湖の自然に身を委ねる楽しさが伝わります。

山並みの一つに比叡秋澄めり

山々の名を教わるのも吟行旅行の有難さ。「あれが比叡ですか。」「どれですか?」など、句友と肩を並べながら秋の山を眺める喜びが伝わります。